

# 女性参政権の歩み 舞台上

## 企画の俳優・奥山さん(甲府出身) 伝え続ける

日本で女性参政権が認められて今年で80年。甲府出身の俳優奥山真佐美さんは市川房枝と女性参政権運動の歩みを伝える舞台を企画し、脚本を書き下ろした。女性の政治参加の必要性や参政権獲得の歴史を伝える活動が続いている。市川房枝をはじめとする多くの女性たちが明治期から声を上げ、労苦を伴った長い道のりの末に手にした権利だ。奥山さんは「私たちが当たり前に行っている参政権は、女性たちが自ら求め、粘り強く訴えて手に入れたもの。80年の節目に歩みを振り返り、意義を再認識してほしい」と話す。(五味優子)

### 80年の節目 「意義再認識を」



「女やき投票できんらあて 婦選、そして18歳は、『民治』年の出来事だ。おかしいやありませんか…」と叫ばれた高知の女性運動家・樋浦喜多子が、町の選挙で投票を希望する場、白権利の上下限をなくし、選挙の幕を開ける。1878年



舞台の脚本を書き下ろした「権利の上に眠るな」普通選、婦選、そして18歳 (いちまるよん、2000円)

「女性参政権は、市川房枝をはじめとする多くの女性運動家たちの努力があったからこそ実現できた」と話す奥山真佐美さん(甲府・山田YBS本社)

物語には樋浦喜多のほかに、矢嶋橋子、平塚らいてう、山田わか、久布白蔭実といった明治・昭和期の女性運動家に加え、樋口一葉や与謝野晶子、金子みすゞら女性の悲しみや生きつらさを文学で吐露した女性も登場する。政治集会への参加すら女性には認められなかった時代から、参政権を獲得するまでの67年にわたる過程を、先人の言葉を通して浮き彫りにする。

日本の女性参政権運動と市川房枝 1909年、平塚らいてうらと新婦人協会を結成。女性の政治参加を促す活動を開始。1911年、久布白蔭実らと共に「婦選」(婦人選挙)を組織し、政府に女性参政権を申請する。1919年、久布白蔭実らと共に「女権会」を組織し、政府に女性参政権を申請する。1920年、改正選挙法で、選挙権を20歳以上の男女に与える。1945年、戦後新憲法が公布され、被選挙権も女性に拡大される。46年4月の衆院選で39人の女性議員が誕生した。

女性への地位と権利の向上に尽くした。市川房枝はいわゆる「女性参政権の最終フナー」。明治11年から多くの女性たちが声を上げ、バトンをつなげてきた。奥山さん、1人ではなし得なかった歩みを浮き彫りにする脚本を目指したという。

ともに一票を投じ、後に議員となった市川房枝を支援した。「かほるさんらの体験や感激を知り、参政権を得た」とてもよやく一人前と認められたと感じた女性たちの思いを今こそかみしめ、私たちが何を成すべきかを考えたい。伊国屋ホールで初演した舞台

舞台化は、早稲田大学名誉教授の大森真紀さんと知り合っ、大森さんの母がかほるさん(甲斐市出身)が書いた評伝「市川房枝と樋浦喜多のあゆみ」に感銘を受けたことが始まりだった。かほるさんは女性参政権が実現して初の衆院選(46年4月)で祖母、母と

性参政権、公民権、結婚を求め、全日本婦連大を組織し、同会は40年解散。終戦後の45年8月25日に「戦後婦人委員会」を組織し、政府に女性参政権を申請する。12月の改正選挙法で、選挙権を20歳以上の男女に与える。1945年、戦後新憲法が公布され、被選挙権も女性に拡大される。46年4月の衆院選で39人の女性議員が誕生した。

で奥山さんは市川房枝を演じた。新型コロナウイルス禍で1回きりの上演だったが注目度は高く、チケットは事前完売。観劇できなかった人々から「ぜひ脚本を読みたい」との要望が寄せられ、加筆修正して出版した。「本を通して、少しでも歴史を知る機会を提供できたらいい」